



笛や太鼓の賑やかな伝統音楽が奏でられる中、4メートル四方はある巨大な墓の周りを、人々が祖先の遺骨を輿に乗せ楽しそうに回っている。マダガスカルの中央高地で行われる「ファマデイハナ」のクライマックスだ。農閑期の9月ごろに、儀礼の数はピークを迎える。

ファマデイハナは、インドネシアがルーツといわれるメリナ族やベツイレウ族などの人々が行う改葬儀礼だ。墓を新築したときや仮埋葬した遺骨を本埋葬するときなどに催され、その際、祖先の遺骨を墓から出し、「ランバメーナ」と呼ばれる野蚕の布で包み、丁寧に吊り直す。儀礼には親戚一同が集い、楽団なども雇って盛大に執り行われる。

マダガスカルでは、死ぬことを「祖先になる」と表現する。死ぬことは生の断絶ではなく、生の延長線上にあるのだという。つまり人は亡くなると祖先になり、生きている人を見守り続ける存在になるのだ。そのため、彼らは立派な墓を作って祖先を祀り、事あるごとにこの儀礼を催す。

ファマデイハナには、マダガスカルの人々の祖先への敬愛の念が込められている。



12

ファマデイハナ

# 遺体を輿に乗せ 祖先を祀る改葬儀礼

